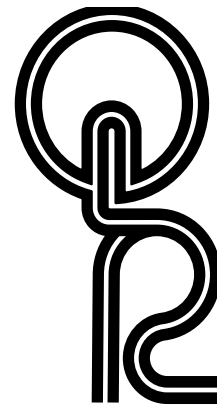
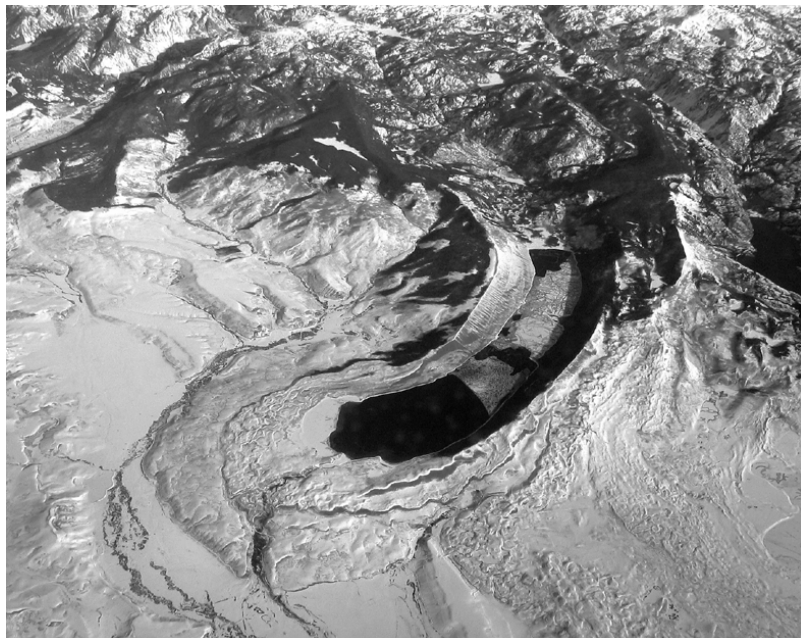


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 11 No.3, 2004



アメリカ合衆国, ワイオミング州パインデール北方, ウィンドリバー山地西麓のモレーンと更新世段丘. ロッキー山地の最終氷期の模式地の一つである. (撮影: 奥村晃史)

Vol. 11 No. 3

June 1, 2004

2004年大会のお知らせ	2	紙碑	10
各種募集	6	50周年実行委員会議事録	11
研究委員会の募集	7	幹事会議事録	12
PAGES NEWS	8	会員消息	13
プロジェクトの案内	9	第四紀に関わる地質層序の新提案	14

第四紀学会2004年大会シンポジウム 「活構造と盆地の形成」の案内

日時：2004年8月29日

会場：山形大学

世話人：山野井 徹（山形大学理学部）、八木浩司（山形大学教育学部）、川邊孝幸（山形大学教育学部）

主旨説明：山野井 徹（世話人代表）（9：30～9：40）

午前の部「東北日本内弧におけるアクティブテクトニクス」

座長 奥村晃史（広島大学大学院文学研究科）

コア・スピーカー（9：40～11：00）

今泉俊文（東北大学大学院理学研究科）・佐藤比呂志（東京大学地震研究所）：

東北地方の活断層と変動地形 - 現状と課題 -

吉田武義（東北大学大学院理学研究科）：

東北本州弧における火成活動史と地殻・マントル構造

話題提供（11：10～11：50）

川邊孝幸（山形大学教育学部）：

堆積盆地の埋積過程からみた東北日本中部のネオテクトニクス

田力正好（東京大学地震研究所・特別研究員）・池田安隆（東京大学大学院理学系研究科）：

段丘の高度分布からみた東北日本の地殻変動

午後の部「盆地と外縁山地の形成」

座長 宮城豊彦（東北学院大学文学部）

コア・スピーカー（13：00～13：50）

山野井 徹（山形大学理学部）：

山形盆地とその外縁山地の形成

話題提供（13：50～14：50）

八木浩司（山形大学教育学部）：

蔵王火山および白鷹火山の巨大山体崩壊とその発生時期

杉山真二（古環境研究所・宮崎研究所）：

脊梁山脈山麓部丘陵地域における中期更新世以降の環境変遷

辻 康男・小畑 勝・辻本裕也（パリノ・サーヴェイ（株））・森岡秀人（芦屋市教育委員会）：

兵庫県六甲山地南麓、芦屋川流域での完新世中期以降の扇状地形成と遺跡分布の変遷

総合討論（15：05～16：20）

座長 山崎晴雄（東京都立大学大学院理学研究科）

第四紀学会2004年大会のお知らせ(第3報)

第四紀学会2004年大会案内

1. 日時・開催場所：2004年8月27日(金)～30日(月)・山形大学
2. 一般研究発表申込み締切：2004年6月11日(金) ポスターセッションの要領
3. シンポジウム：「活構造と盆地の形成」
4. 巡検：「新庄・山形盆地のテフロクロノロジーと活構造」(8月29日夕方-30日実施・先着25名、申し込み締切8月11日(水))
5. 普及講演会：2004年8月28日(土)午後1時～4時半「活火山と活断層、山形は大丈夫？」於：山形国際ホテル
6. 懇親会：2004年8月28日(土)午後6時～8時 山形大学生協食堂
7. 講演予稿集の販売
8. 宿泊案内

1. 日時・開催場所の概要

研究発表, 総会, 評議委員会, 懇親会, シンポジウム, 普及講演会, 巡検:

日程: 2004年8月27日(金)～8月30日(月)

実行委員会委員長: 陶野郁雄

連絡先: 陶野郁雄

〒990-8560 山形県山形市小白川町 1-4-12

山形大学理学部地球環境学科

e-mail: tohno@sci.kj.yamagata-u.ac.jp

Tel: 023-628-4644 Fax: 023-628-4661

開催場所:

一般研究発表(口頭・ポスター), シンポジウム, 総会, 懇親会: 山形大学(場所等の詳細は第4報でお知らせします)

27日(金)一般講演, ポスターセッション, 評議委員会(夕方)

28日(土)一般講演, 総会(昼前), ポスターセッション, 懇親会

29日(日)シンポジウム「活構造と盆地の形成」

28日(土)普及講演会「活火山と活断層, 山形は大丈夫?」(山形国際ホテル: 山形バスセンター隣)

8月29日(日)～30日(月)巡検「新庄・山形盆地のテフロクロノロジーと活構造」(案内者: 八木浩司ほか)

2. 一般研究発表

2.1 一般発表の申し込みは, 6月11日(金)です。まだの方はお急ぎ下さい。

2.2 ポスターセッション要領

ポスターは大会期間中掲示できる予定ですが, 講演数が多数の場合1日のみの掲示になるかもしれません。詳しくは第四紀通信11-4に掲載されるプログラムをご覧ください。

コアタイムには発表者はその場に立ち会い, 説明するものとします。また, ショートサマリー(各2-3分)も予定しています。詳しくは第四紀通信11-4に掲載されるプログラムをご覧ください。

ボード面積は1題あたり, 縦180cm, 横120cmです。

発表番号・発表題名・発表者名をポスターのタイトルとして明記してください。

ポスターの掲示に使用できるのは画鋏のみです。掲示に必要な画鋏は各自でお持ち下さい。

ポスター会場では, コンピューターやビデオなどを使用した発表も許可しますが, 使用する機器に関しては発表者をご準備下さい。延長コードや机などは準備委員会で準備します。これらの機器をポスター発表で使用される方は, また画鋏では掲示できないもの(例えばかなりの重量があるものなど)を発表に使用される方は, 必ず8月16日(月)までに郵送か電子メールで大会実行委員会にご連絡下さい(第四紀学会行事幹事あてではありません)。電話での連絡はご遠慮下さい。

3. シンポジウム

「活断層と盆地の形成」

本通信のシンポジウムの案内をご覧ください。

4. 巡検

「新庄・山形盆地のテフロクロノロジーと活構造」(案内者: 八木浩司ほか)。

巡検の概要と日程

29日 シンポジウム終了後

16:45 山形大学発

19:00 肘折温泉着(泊)

肘折温泉若松屋村井六助

30日 下湯ノ台(火砕流台地と寒風田地すべり), 長者原断層・沖の原断層, 芦沢(SK・Hj-Kth), 南新庄(O-Ik, 山屋

層),鳥越(O-Ik,舟形断層),鮭川村泉川(丘陵を構成する山屋層とO-Ikその他のテフラ),下牛潜(高位段丘を覆うテフラSm),升形(鮭川断層による撓曲変形),本合海(低位段丘群の逆傾斜変形),最上川沿いの段丘地形群とその変形,村山市樽石川扇状地(断層変位地形)

17:15 山形空港
(大阪行き最終19:00)
18:00 山形駅(東京行き18:36)
状況によっては天童駅解散

地形図:

1/5万 羽前中山、新庄、清川、尾花沢、月山、館岡、山形

1/2.5万 羽前中山、新庄、舟形、羽根沢温泉、古口、尾花沢、延沢、海谷、館岡、谷地

(1/2.5万をお勧めします)

募集人員:25名

移動:中型バス

参加費用:14,000円(宿泊代、昼食代を含む)
(尚、宿泊代は9,000円)

申し込み方法:

参加を希望の方は、ハガキ、またはE-mailにて、氏名、所属、連絡先(住所、電話、E-mailアドレス)、すでに定員オーバーの場合のキャンセル待ち希望の有無を明記のうえ、下記あてに申し込んでください。先着順に受け付けます。電話での受付はいたしません。受付後、個別に案内などをお送りします。なお、参加の確認と参加費の徴収および巡検資料の受け渡しは、学会期間中に巡検コーナーを設けて行う予定です。巡検のみ参加される方は、その旨をお書き添えください。

申し込み先:八木浩司

〒990-8560 山形県山形市小白川町 1-4-12

山形大学教育学部社会科教育教室

e-mail:yagi@kescriv.kj.yamagata-u.ac.jp

Tel:023-628-4393

申し込み締め切り:8月11日(水)満席になり次第、終了します。

5. 普及講演会

「活火山と活断層、山形は大丈夫？」

直下型地震や活火山の噴火は予知できるか、災害を免れることはできるのか

主催:日本第四紀学会・山形県

場所:山形国際ホテル(山形バスセンター隣接,山形市香澄町3-4-5,TEL:023-628-1313)

日時:8月28日(土)13:00-16:30

内容:以下の講演者と演題(仮題)を予定しています。

活断層

阿部勝征(東京大学) 日本の活断層と地震の予知

長谷見晶子(山形大学) 山形の地震活動

活火山

岡田 弘(北海道大学) 日本の活火山と予知が成功した2000年有珠山噴火

伴 雅雄(山形大学) 蔵王火山の噴火と災害

フロアーディスカッション

コーディネーター 五味陸仁(放送倫理番組向上機構・前TBS)

実行委員長:陶野郁雄

実行委員:田宮良一・千葉達朗・(山形県砂防課・消防防災課)

6. 懇親会

日時:8月28日(土)18時~

場所:山形大学生協食堂

参加費:一般:5000円,院生・学生:2500円

芋煮、蕎麦、地酒など山形名物をいろいろお出しします。懇親会の受付は大会当日に行います。

7. 講演予稿集の販売

講演予稿集の予約販売は致しません。会期中に、会場受付にて直接販売します。郵送希望の方は、大会終了後、第四紀学会事務局(学会事務センター)へ直接申し込んでください。

8. 宿泊

次ページの宿泊の案内と申し込みを御覧ください。

お申し込みのご案内

謹啓 ようやくみちのく山形も良い季節となりました。会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、第四紀学会の開催にあたりまして、弊社東急観光(株)山形支店がご来県の際のご宿泊などのお世話をさせて頂くことになりましたので、ご挨拶かたがた以下ご宿泊等のご案内を申し上げます。敬白
東急観光(株)山形支店長 高橋 伸治

1. 宿泊につきまして 宿泊料金には、通信連絡費・取扱い料金が含まれています。

明示しております宿泊料金は、1泊朝食付(消費税・サービス料込み)の1名様料金になります。

利用ホテル	客室タイプ	料金	申込記号	大学からの所要時間
山形グランドホテル	シングル	11,000	A-S	徒歩20分(市内中心部)
	ツイン	9,800	A-T	
ホテルオーヌマ	シングル	10,700	B-S	徒歩5分
	ツイン	9,500	B-T	
山形イン	シングル	8,800	C-S	バス12分(バス基点近く)
	ツイン	7,800	C-T	
山形国際ホテル	シングル	8,300	D-S	バス12分(バス基点)
	ツイン	7,300	D-T	

別紙申込書の「宿泊申込記号欄」には、 - までの記号を記入お願い致します。

バス基点(ターミナル)は、山形駅から徒歩5分程に位置します。また、市内中心部は、山形駅から徒歩で15分程です。

2. お申込方法につきまして

任意の参加・宿泊・申込書に必要な事項をご記入の上、06月30日(水曜日)迄に、必ずFAXにてお申込下さい。又、お申込されました申込書は、必ず無くさない様をお願い致します。07月23日(金曜日)迄に回答書・請求書・利用券を送付致します。

回答後ご変更等があった場合、08月13日(金曜日)迄に最終回答書・請求書、利用券を送付させて頂きます。当該回答書・請求書、利用券がお手元に届きましたら、08月20日(金曜日)迄に東急観光(株)山形支店宛お振込みください。

殖産銀行山形駅前支店 普通預金口座番号：048372 東急観光(株)山形支店

(振込手数料は各自ご負担お願い致します。)

変更・取消によって生じた差額は、大会終了後にご指定の口座へご返金させて頂きます。

3. 取消し料につきまして ご都合により予約取消の場合、取消料がかかります。

適用日	14日前以前	13日~8日前	7日~前日	当日	無泊/無連絡
取消料	無料	10%	20%	80%	100%

4. その他 学会当日終了時までには、受付に領収書を準備させて頂きます。

領収証をご希望の方は、大会当日受付で準備致しております所定用紙に(宛先、金額、内容を)ご記入の上、お申しつけ下さい。

5. 宿泊等に関するお申し込み先、及びお問い合わせ・変更・取消先について

東急観光株式会社 山形支店 〒990-0039 山形県山形市香澄町1-11-22

TEL: 023-641-4141 / FAX: 023-641-1019 /

E-mail: yamagata3@tokyu-tour.co.jp

『第四紀学会山形大会』係 担当者 山田・三浦・柏村・阿部

ご参加申込必要事項	ご参加者氏名(フリガナ)	所属箇所名	郵送物送付先住所(自宅・職場)
	か記載)	送付先連絡番号(電話・FAX)	ご宿泊日(8月26日から28日)
	ホテル記号	合計人員&金額(ご確認のため)	

その他にも、温泉旅館、及び山形駅周辺・七日町にビジネスホテル等が数多くあります。

第8回尾瀬賞募集のお知らせ

(財)尾瀬保護財団より、第8回尾瀬賞募集のお知らせが届いています。

・賞の内容

湿原に関する研究において、学術的および湿原保全の見地から優れた業績を上げ、今後の研究の深化が期待される人を対象とする。

「泥炭を有する湿原及びそこを生活の場とする生物」を研究対象とし、平成16年4月1日現在において原則として50歳未満の個人(グループ研究の場合は代表者)。

受賞は2名以内、1名につき賞状および賞金100万円を贈呈。

・募集期間

平成16年4月1日～9月20日(当日の消印有効)

詳しくは(財)尾瀬保護財団ホームページ <http://www.oze-fnd.or.jp/> をご覧ください。

2004年度 地球化学研究会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者の募集

地球化学研究協会より、下記の「三宅賞」および「奨励賞」候補者の推薦依頼がありました。賞・助成とも、詳細な応募要領と応募用紙が学会事務局にあります。自薦・他薦を問わず、応募される方は、応募用紙に記入の上、下記応募先に直接お送りください。

1. 三宅賞

対象：地球化学に顕著な業績をおさめた科学者

表彰の内容：賞状、副賞として賞金30万円、毎年1件(1名)

応募方法：所定の用紙に必要事項を書いて下記のあて先へ送付

締切：2004年8月31日

2. 奨励賞

対象：地球化学の進歩に優れた業績をあげ、将来の発展が期待される研究者。下記締切日に35才以下であること

助成内容：1件10万円、毎年1件

応募方法：所定の用紙に略歴、研究業績の他、推薦理由などを記入し、下記あて先へ送付

締切：2004年8月31日

応募先：地球化学研究協会

〒166-0002 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

電話 03-3330-2455 (FAX 兼用)

なお、t-sagi@ka5.koalanet.ne.jp でもお取次ぎします。

* 応募用紙などは地球化学研究協会事務局へお申し出ください。

研究委員会の募集のお知らせ（再掲）

研究委員会は、会則第17条に基づく特別委員会の一種で、第四紀学の特定の研究課題についての国内・国外の情報を交換し、研究を推進するためのグループです(下記内規参照)。国際第四紀学連合(INQUA)の研究委員会(Commission:分科会Sub-commission,作業部会Working Groupを含む)などに対応する国内委員会としての役割を果たすことを目的としています。2003年7月に開催されたINQUA第16回大会で新しく決まった委員会構成を受けて、2004年度(2004年8月～2005年7月)研究委員会の募集を行います。

今回発足したINQUAの新委員会については、第四紀学会ホームページの「INQUAの新Commission組織と新しい研究計画の公募のお知らせなど」をごらんください。

委員会の設置を希望される場合は、下記内規を参考に、委員会名、代表者名、連絡先、目的、活動予定期間、予想される参加者数と少なくとも5名以上の正会員の提案者名を明記の上、6月30日までに庶務幹事まで文書(または電子メール)でお申し込み下さい。委員会は全て新規募集になります。2003年度の委員会の継続を希望される場合も、改めて申込書をご提出ください。

提案頂いた委員会は、本年8月に予定されている評議員会で審議されることとなります。承認され次第、助成金の交付を受けることができます。

庶務幹事 久保純子

(連絡先) 169-8050 新宿区西早稲田 1-6-1 早稲田大学教育学部
TEL. 03-5286-1583, FAX. 03-5273-4435, E-mail sumik@waseda.jp

日本第四紀学会研究委員会内規(1992年9月13日評議員会)

- 1) 研究委員会は、会則第17条に基づく特別委員会の一種で、第四紀学の特定の研究課題についての国内・国外の情報を交換し、研究を推進するためのグループである。当分の間、国際第四紀学連合(INQUA)の研究委員会(Commission)(分科会Sub-commission,作業部会Working Groupを含む)などに対応する国内委員会としての役割を果たすことを目的とする。
- 2) 研究委員会の設置は、少なくとも5人以上の正会員からの申し出に基づいて、幹事会から評議員会に提案され、評議員会の承認を得るものとする。
- 3) 研究委員会の発足を希望する会員は、委員会名、代表者、連絡先、目的、活動予定期間、予想される参加者数などを文書で幹事会に申し出るものとする。
- 4) 研究委員会の目的を推進するために、学会は財政的に可能な範囲内で、研究委員会の会議費を4年を限度として交付する。
- 5) 研究委員会の任期は当面4年間とするが、5年度以降も会議費の配分を受けずにさらに4年を限度として任期を延長することができる。
- 6) 研究委員会は、集会の開催通知や活動記録などを「第四紀研究」に掲載することとし、集会は一般会員にも公開することを原則とする。
- 7) 研究委員会の責任者は毎年年度末までに活動報告および次年度の活動の希望の有無を幹事会を経由して評議員会に文書として提出しなければならない。
- 8) 研究委員会の運営は責任者に一任するが、この内規で処理できない点については、幹事会と協議するものとする。

2004 PAGES NEWS

多田隆治 (東京大学大学院理学系研究科)

1) PAGES とは? (詳しくは <http://www.pages.unibe.ch/> をご覧ください)

IGBP (International Geosphere Biosphere Program) のコアプロジェクトの一つで、PAST GLOBAL CHANGES (古地球環境変動) を略したものです。「定量的に復元された過去の環境変動の知識を基礎に、その中で現在の環境を位置付ける事が、近未来の環境変動を予測する上で不可欠である」事を主張し、その為に必要な古地球環境変動に関する研究の促進を目的として活動しています。

2) PAGES の活動とは?

PAGES の活動は、大別して以下の様に分ける事が出来ます。

- i) 古地球環境変動研究をグローバルに連携しつつ進める為の主要テーマ設定
- ii) それら主要テーマに関係した研究活動促進のための研究集会の開催や支援
- iii) Home Page や News Letter を通じた広報活動、情報の交換、共有
- iv) Summer school の開催などを通じた学生や若手研究者の教育活動
- v) 誰でも利用できるデータベースの構築

こうした PAGES の活動の方針を決め、その促進を計るため、PAGES SSC (研究推進委員会) が毎年 1 回行われます。

3) PAGES の主要テーマとは?

PAGES の主要テーマは、以下の 5 つからなります。

- i) PANASH: PEP (pole-equator-pole transects I, II, III) から構成されます。地球を緯度方向に 3 つのトランセクトで切り、各トランセクトについて古気候復元をしてゆこうという計画です。
- ii) CLIVAR/PAGES: World Climate Research Program (WCRP) との合同研究計画で、10 ~ 100 年スケールでの気候変動メカニズムの理解を深めようとするものです。
- iii) IMAGES: International Marine Past Global Changes Study (IMAGES) の略で、PAGES の姉妹プログラムです。海洋堆積物を使って、古気候、古海洋変動を復元しようとする計画です。
- iv) POLAR PROGRAMMES: CAPE (Circum Arctic Paleoenvironment), QUEEN (Quaternary Environment of the Eurasian North), ITASE (International Trans-Antarctic Scientific Expedition), ANTIME (Antarctic Ice Margin Evolution) から構成されます。環境変動に敏感な極域に焦点をあて、その古環境変動を復元しようという計画です。
- v) PAST ECOSYSTEM PROCESSES AND HUMAN-ENVIRONMENT INTERACTIONS: HITE (Human Impact on Terrestrial Ecosystems), LIMPACS (Human Impact on Lake Ecosystems), LUCIF (Land Use and Climate Impact on Fluvial Systems) から構成されます。人間活動と環境との相互作用の理解を目的とした計画です。

4) 2003 PAGES SSC と IGCP Conference における古環境変動研究の流れ

2003 年 6 月 18 ~ 19 日にかけて、カナダのバンフで PAGES の SSC が、その後引き続いて IGBP Conference が開催されました。IGBP では、過去 12 年間続いた IGBP の第 1 期が昨年終了し、今年から新たに始まる IGBP 第 2 期に向けて、コアプロジェクトを一新しました。PAGES は、第 1 期から引き続き継続される数少ないコアプロジェクトであり、第 2 期には IGBP の各コアプロジェクトを繋いで IGBP 全体の方向を呈示してゆく中心的な役割を果たすものと期待されています。いわば、第 1 期にはコアプロジェクトの中で付け足し的な位置付けをされていたものが、第 2 期にはプロジェクトの主役の 1 つに躍り出たと言えます。

会議での議論の流れを見る限り、IGBP 第 2 期では、

- i) コアプロジェクトや関連するパートナープログラム (IHDP, WCRP, DIVARISITAT) との間の連携、協力をより強める。
- ii) 特に、human dimension, ecology, biogeochemical cycles の側面をより強めてゆく。

iii)地球環境変動を考える上で鍵となる地域(モンスーン・アジア、高緯度・極域、西赤道太平洋、北大西洋など)に焦点を当て、コアプロジェクト横断型の地域研究を促進してゆく。といった方向に、計画が動いてゆくものと思われます。

今年のSSCは、7月中旬にケニアで行なわれる予定ですが、私は、大学の本務と重なってしまったため、出席できません。

NEW COASTAL PROJECT IGCP495

IGCP Project 495: Quaternary Land-Ocean Interactions: Driving Mechanisms and Coastal Responses

I am delighted to be able to report that UNESCO has given approval to the above project which will run from 2004 to 2009. Shahidul and I want to thank everyone who supported us in the preparation of this project, especially Professor Colin Murray-Wallace who was leader of the last IGCP project (IGCP437).

You can download the full project design from the web site address below. This contains details of the rationale behind the project, links with previous and current work, as well as details regarding proposed working groups and provisional locations for international meetings. The latter two areas will be subject to debate and ratification at the first international meeting, so should therefore not be seen as set in stone. In time, this web site will become the home of IGCP495.

http://www.geography.dur.ac.uk/research/IGCP_495/index.html

If you have problems accessing this site, please email me at a.j.long@durham.ac.uk and I will send you a copy of the project design as a pdf or Word file.

We are working hard to arrange the first international field meeting of this project for the late summer / autumn of 2004, which we hope will be held on the Maine coast, USA. Further details will be circulated very shortly.

This email list is based on one used for IGCP347. Please let me know if you wish to have your name removed, or if there are corrections to be made.

We very much look forward to working with you over the coming years, and hope that this IGCP project continues the excellent work completed under previous IGCP coastal and sea-level projects.

With best wishes,

Yours sincerely,

Antony and Shahidul (Project Leaders)

新井房夫氏の思い出

新井房夫さんが亡くなられたことを知ったのは、日本大学の遠藤邦彦教授からのメールであった。それはまったく突然の知らせであり、大変驚いた。最近では賀状を交換するだけで、具体的な交流はなく、ただただお元気でいられるだろうと勝手に思い込んでいたのであった。

新井房夫さんをはじめて知ったのは、彼の論文を通じてであった。当時、私は浅間火山のテーマを久野先生や水上先生からいただいて、野外調査を始めようとしているところだった。手始めに集めた文献の中に、新井さんの北関東における降下軽石・火山灰層の論説があった。強烈な印象を受けたのが、軽石火山灰層の厚さと土壌層の厚さの関係についての議論であった。新井さんの論旨ははっきりしていて、軽石火山灰層の厚さは給原火山から遠ざかるにつれて規則的に減少するのに対して、間に挟まれる土壌層は火山からの距離にかかわらず、厚さがほぼ一定であるということを描き出すものであった。この考えは、今では学界に広く受け入れられていると思うが、当時としては新鮮な衝撃を与えるものであった。そのころ、伊豆大島火山の降下火砕堆積物を徹底的に調べて、日本のテフラ学に重要な貢献をした、故中村一明氏も、安山岩質の火砕堆積物に関心を持って、浅間の軽石堆積物を私と一緒に調査しようとしていたときであったので、新井さんとわれわれ二人の出会いは、きわめて感動的であった。

新井さんは、はるかに経験をつままれていたにもかかわらず、新米の私を対等の研究者として扱っていただき、斑晶鉱物の性質を基にしてテフラの同定をするという、新井さん畢生の仕事の芽生えの時代から、いろいろと相談をもちかけられた。鉱物の屈折率の測定が重要な作業であったが、新井さんの実験室は、彼の性格を見事に現している様相を示していた。正確に屈折率を測定するには、浸液の温度を精密にコントロールしなければならない。実験室全体を空調するには、大げさな設備が必要になるが、新井さんは、日曜大工店から集めてきた、簡単なヒーター、扇風機、サーモスタットなどを組み合わせて、何気なく、完璧な空調装置をくみ上げて使っていたのである。

彼の道具好きは相当なもので、いろいろと奇抜なものを含めて、道具道楽(?)の一面が面白かった。野外見学旅行の折に、リーダーを勤められた新井さんは、車のルーフラックに縛り付けてあった伸縮自在のポールを引き伸ばして、巨大な露頭の脇に立てかけて見せた。それは測量ポールのように20 cmごとに赤白の節目が記され、全体で10 mもの高さがあった。強化プラスチック製で森林業用の専用品であり、鮮やかな赤白のポールは露頭のカラー写真で見事にスケールとしての役割を果たしていた。もっと小型の露頭のためには、さらに色とりどりの鮮やかなスケールも用意されていた。露頭の写真はテフラ学では重要な素材のひとつである。きちんとした見やすい露頭の写真を作ろうとする、新井さんの細かい心遣いに、道具と露頭に対する並々ならぬ愛情を感じたものであった。

テフラの同定をするという作業は、単に機械的に鉱物の屈折率や組成を測定すればよいというものではない。新井さんがこの分野で、あれだけ名声を確立され、多くの研究者からテフラ同定の依頼を受けられた理由は、別のところにある。新井さんの作業を傍でみると、鉱物の大きさの分布、晶癖、へき解、多色性、累帯構造、その他簡単には記述できないような微妙な特徴すべてに注目して、噴出物である軽石の全体像を総合的に捕らえることに力を注いでおられることがよくわかった。私が深く感銘を受けたのは、そのような総合的な特徴を、それぞれの噴出物についてくわしく記憶していて、顕微鏡を見ながら、自分の記憶に蓄えてある膨大なデータベースと照合して、同定の結論を出されるというプロセスの見事さであった。ある意味で、まったくオーソドックスなやり方であるが、ここまで極めるのは、新井さんの才能と、そしてそれにもまして、テフラに対する愛情に支えられた努力の積み重ねであったと思う。

私は、新井さんの要請を受けて、しばらく群馬大学の非常勤講師として、火山学関係の集中講義をさせていただいた。この期間を通じて、新井さんの人となりに親しく接することができたのだが、彼は真実の紳士であった。控えめで穏やかな話し方と温かい笑顔からは、新井さんの真摯な性格がはっきりと現れていたが、少し付き合っていると、彼の強固な世界観とはっきりした意思の強さに突然突き当たって、はっとさせられることが少なからずあった。

新井さんは虚飾を嫌い、心にもないことを言うことに強い嫌悪感を抱いておられた。たとえば、時として研究者同士でお互いに「先生」と呼び合うことを見かけるが、彼はこれをひどく嫌っていた。相手を心の底から尊敬して、先生と呼ぶのではなく、ただ過剰な装飾的敬語として使われる虚飾のなかに、自分自身をゆだねることに強く反発されたのだと思う。私自身、つねづね「新井さん」と呼んでくれといわれていたにもかかわらず、その場の雰囲気ですっかり「新井先生」と言って、ぴしゃりと拒絶されたことがあった。一時が万事で、新井さんの清廉で、真心を貫くという生き様に私は深い感銘を受けたのであった。

地元の群馬県地域のテフラ学、第四紀学、地質学の振興にとどまらず、日本のそして世界のテフラ学に大きな貢献をされた新井さんは、何よりも生身の人間として、同輩、友人、そして教え子たちから敬愛される人であった。新井さんのご冥福を心からお祈りするものである。

(荒牧 重雄)

第1回 日本第四紀学会50周年記念 事業実行委員会 議事録

日 時：2004年3月6日(土) 14:00 ~ 16:30
会 場：早稲田大学教育学部 16号館 512室
出席者：真野勝友副会長、岩田修二、鈴木毅彦、山崎晴雄、久保純子、中村俊夫、御堂島正の各会員

議 事：

- ・副会長挨拶
 - ・委員紹介
 - ・委員会開設までの経過説明：山崎幹事長が、50周年記念事業企画委員会の設置から、答申の発表、そして、今回の実行委員会の設置にいたる経過を説明した。
 - ・企画委員会答申の説明：山崎幹事長が配布資料に基づいて答申の内容を説明した。
 - ・委員長・役員選出：実行委員会委員長には熊井久雄会長、事務局長に鈴木毅彦会員を選出した。
 - ・今後の進め方と答申に関する自由討議：以下の内容について自由討議を行った。いくつかの提案が出され、今後の方向性が定まったものもあるが、これらは委員会としての決定事項ではない。
0. 岩田研連委員長より研連は秋にシンポジウムを予定しており、第四紀学会とのリンクの必要性があることが述べられた。
 1. 募金について：募金は必要であるという意見が大半だった。しかし、前回値上げは50周年記念事業を実施するという意味も含まれていたのではという意見があり、幹事長より、会費値上げ分は通常業務の必要最低限をカバーするためのものであり、特別な事業を行うには募金が必要との説明があった。募金額は事業内容を示した上で決める必要があるので、募金開始は実施内容の大枠が決まってからとなった。
 2. セレモニー：4月29日の学会発足日の実施では人が集まらない可能性があり、2006年8月の大会(東京で実施)時に行なうこととした。会場はあとで決める。セレモニーは総会を拡大したような形で、パーティーは懇親会を拡大したような形で、また、学会への功労者を招待・表彰するのが良い

という意見があった。あまり、セレモニー等にお金をかけないという方向で進めることとした。

3. 国内シンポジウム：研連は10月に日本の第四紀研究の発展などをテーマにシンポジウムを行う予定。その成果を基にa. 一般向けの本を作る、b. 他学会等への宣伝・普及のためのCD作成などを行う、との説明があった。
50周年記念事業ではシンポジウムにかかわる調整・総括を行うためのWGをつくる。
50年間の第四紀研究の総括が必要。主な成果をリストアップして日本の第四紀研究者の貢献をまとめる。WGで分野ごとに総括を行う(研究全体のながれ、日本第四紀学会の論文のながれ)。シンポジウムに伴う調査として50年間の第四紀研究の主要論文、日本人が書いた国際誌、紀要、QR等の論文をリストアップする。会員に呼びかけて成果(第四紀研究以外の論文など)をWeb登録してはどうか。情報は広い範囲から集める。シンポジウムは大会と同時にを行うが、1~2日の時間をかける。
4. 国際会議(シンポジウム)：大会とは別に行う。外国人の招待は募金額しだい。
5. 第四紀地図の改訂：事業の中心としていく。出版会と協議する。
改訂箇所、何を变えるのか。前回出版後、既存データが大幅に増えた。GIS化ではデータの均質性に問題がある。英文化。
6. 記念出版物：第四紀双書は世界の状況から見て困難。野尻湖のようなものを新書で出す。一般向け(ジュニア向け)に、普及書を。
7. 特別展：相手次第。特別展実施を希望する博物館(大阪市立自然史博物館、2006年)があれば積極的に協力する。他の博物館にも売り込む。ただし、博物館の行事予定はかなり(数年)前から決まるので、今からでは時間の問題がある。
8. 名称変更：引き続き検討する。

・次回日程：委員の参加を増やすためアンケートをとって決める。しかし、4月中に2回目を開きたい。

以上

文責 山崎

2003年度第5回幹事会議事録

日時：2004年1月31日(土) 10:00-10:30
会場：明治大学駿河台校舎 12号館10階2103教室
出席者：熊井久雄(会長)、真野勝友(副会長)、山崎晴雄、松浦秀治、小野 昭、池原 研、斎藤文紀、兵頭政幸、河村善也、中川庸幸(学会事務センター)、久保純子(記録)
欠席者：奥村晃史
議事：
当日開催の評議員会議事について確認した。

2003年度第6回幹事会議事録

日時：2004年4月3日(土) 14:00-16:30
会場：早稲田大学教育学部 16号館5階512演習室
出席者：熊井久雄(会長)、山崎晴雄、奥村晃史、松浦秀治、池原 研、斎藤文紀、兵頭政幸、中川庸幸(学会事務センター)、久保純子(記録)
欠席者：真野勝友、小野 昭、河村善也

議事：

1. 報告事項

庶務

第5回幹事会(1月31日)議事について確認した。
会員動向(2月分)：新井房夫評議員が逝去され(1月10日)、紙碑原稿を依頼した。
学生会員継続届の件を通信11-2に再掲した。
新研究委員会募集(INQUA対応)の件を通信11-2に掲載した。
科研費審査委員候補者推薦の件は、評議員による投票により選出された会員の情報を提供した：地質学1名、文化財科学3名、層位古生物第1段3名、層位古生物地球科学第2段2名。
受入図書(9機関17冊)

会計

会誌印刷費、会報発行費、会誌・会報発送費報告。

編集

第四紀研究43巻1号刊行、2号印刷中、3号編集状況。

編集委員会における受理提案の手続きについて。

行事

山形大会第2報を通信11-2に掲載した。普及講演会「活断層と活火山」を8月28日に開催の予定(山形県と共催)。

広報

通信11-2を編集、発行した。次号通信11-3の原稿は4月末までに広報委員会へ。

渉外

地球惑星科学合同大会プログラム(通信11-2)のうち、第四紀学会オーガナイズのセッションは「第四紀」および「活断層と古地震」(5月10-11日)、「沖積層研究の新展開」は第四紀学会提案ではないが関連セッションである。
自然史学会連合より会員数および博物館関係者について情報提供依頼の件の報告。

企画

1月31日(土)ミニシンポジウム報告(通信11-2に掲載)。

学会事務センター

名簿作成のための依頼状発送の件。

50周年記念事業実行委員会報告

第1回委員会(3月10日)報告。

研連報告(奥村)

地質科学総合研連第四紀研究委員会報告と普及講演会の共催について。

2. 審議事項

庶務

転載許可：安曇村教育委員会(植木岳雪・山本信雄2003「長野県西部、梓川上流部の段丘面群構成層から産出する材の¹⁴C年代」、第四紀研究42巻5号を植木岳雪「平成13・14年度沢渡池尻地区地形調査事業報告書」安曇村教育委員会へ)、NHK学園(春成秀爾2001「旧石器時代から縄文時代へ」第四紀研究40巻6号所収図および直良信夫1959「岩手県花泉町金森の化石類と人類遺物と考想される骨角器について」第四紀研究1巻4号所収図を、小林達雄監修講座テキスト『考古学入門』学校法人日本放送協会学園へ)
学生会員継続届けのフォーマットは、現行では指導教員の署名捺印が必要であるが、学生証のコピーでも可とすることとした。

会計

会報(第四紀通信)の原稿電子化により発行費を圧縮できないか、また、今年は会員名簿の発行があるため紙質等を検討することとした。
会員名簿への広告掲載依頼について決定した。また、名簿に掲載する関係学協会連絡先の確認を手分けしておこなうこととした。

行事

2005年大会開催地については、2006年50周年記念大会会場を東京とすることより、西日本方面で調整することとした。

渉外

自然史学会連合より情報提供依頼の件、関係者の連絡先については、名簿を渡すことは控えることとした。

3. その他

核燃料サイクル機構より照会のあった法人文書の開示請求(現金出納簿における学会名の開示)を承認した。

学術会議地質学研連のアンケート(国際惑星地球年ほか)：学会としての取り組みについて回答することとした。

第四紀研究バックナンバーや寄贈図書の保管について：都留文科大学で保管分は50周年記念大会までに処理する、寄贈図書は会員への利用還元ができないので適切な受入先に寄付する、国立情報研究所の電子図書館サービスに加入することなどの方策を検討した。

次回幹事会は5月22日(土)早稲田大学にて開催予定。

第四紀に関わる地質層序の新提案

INQUA Executive Committee から、国際層序委員会(ICS)が提案した地質年代表の改正案に対し意見を求めてきています。改正の中身は、ネオジーン(Neogene)を現在まで延長して第四紀を省く、ただし完新世とあわせた第四紀亜紀(Quaternary Subsystem)を新設する、というものです。なお、この提案はINQUAのCommission on Stratigraphy and Chronologyでの討論をとばしてICSが出したものであり、INQUAとして十分議論したものでないことを付記しておきます。日本第四紀学会としてはこの改正の提案を重大な問題として受け止め、幹事会で対応を検討中です。追加情報や幹事会の検討内容等は次号に載せることとし、INQUAからの手紙を以下に掲載します。

Redefining the Quaternary

Dear Colleagues,

The Geological Time Scale (GTS) is one of the great achievements in Earth Sciences. Recent revisions, and proposed revisions, are part of the ongoing mandate of the International Commission on Stratigraphy (ICS) – see www.stratigraphy.org.

One of the proposed revisions of the GTS is to extend the Neogene System (Period*) up to the present, thereby subsuming what is currently the Quaternary System (Period). While some may see this as a threat to the Quaternary, I see it as a wonderful opportunity to redefine the Quaternary in the way that we have wanted for some time – namely to extend the base downwards from 1.81 Ma (Plio/Pleistocene boundary) to 2.6 Ma (base of Pliocene Gelasian Stage).

Let me speak plainly when I say that we (INQUA) have little hope of retaining the Quaternary System, above the Neogene System, as it is at present. The weight of support is too great, from within ICS, for extending the Neogene up to the present. Furthermore we have no hope of changing the Plio/Pleistocene boundary – we tried that in 1997-98, resulting in a most acrimonious debate between INQUA and ICS.

I believe that our best, and only reasonable course of action, is to grasp the opportunity presented to us, and redefine the Quaternary as a Subsystem within the extended Neogene System, with base at 2.6 Ma. Indeed, I have been asked to submit such a proposal to ICS. The proposal below is a draft for comment/discussion and, perhaps, for endorsement by INQUA. As recommended by ICS, I have tried to keep the document short and to-the-point.

A strength of the proposal, I think, is that it decouples the base of the Quaternary from the “blood sweat and tears” of the Plio/Pleistocene boundary.

The views expressed are my own, but I sense that they will be widely supported by Quaternary scientists. After all, this is a chance to extend our time domain by 800,000 years!

To reiterate, this may be a once-in-a-lifetime opportunity - we are unlikely to get another opportunity to define the Quaternary the way we want it.

Brad Pillans, President INQUA Stratigraphy & Chronology Commission

* “Period” is the geochronologic unit equivalent of the chronostratigraphic unit “System”

PROPOSAL TO REDEFINE THE QUATERNARY

In the revised geological time scale (GTS2004) Lourens et al. propose to extend the Neogene System (Period) up to the present, thereby making the Quaternary System (= Pleistocene + Holocene Series) redundant. See Figure 1.

Here I propose that the Quaternary be redefined as a Subsystem (Subperiod) of the Neogene, and that its base be defined at the base of the Pliocene Gelasian Stage at 2.6 Ma (GSSP ratified – Rio et al. 1998. Episodes 21, 82.). After recent discussions by the ICS executive, in consultation with the IUGS executive, they have requested that the various formal stratigraphic groups of ICS and INQUA be asked to consider the proposal.

In support of the proposal for a Quaternary Subsystem (Subperiod), I note the following:

1. There is overwhelming support from INQUA members, who I have talked with, to retain the Quaternary as a formal chronostratigraphic unit.
2. There is precedence for naming Subsystems in the GTS, specifically the Mississippian and Pennsylvanian Subsystems of the Carboniferous.
3. Redefinition of the Quaternary will make use of an existing GSSP (Gelasian Stage).
4. Decoupling the base of the Quaternary from the Plio-Pleistocene boundary (1.8 Ma) would, I believe, bring an end to the long-running arguments over the position of the Plio/Pleistocene boundary.
5. A majority of INQUA members appear to favour a “long” Quaternary (2.6 Ma) over a “short” Quaternary (1.8 Ma). In essence, the preference for a “long” Quaternary reflects perceived continuity of character over that time. For example, around 2.6 Ma, Chinese loess deposition becomes widespread and is substantially different in character to the underlying Red Clay (e.g. Ding et al. 1997. Quaternary International 40, 53).
6. Around 2.6 Ma, deep sea oxygen isotope records show the culmination of a series of cycles of increasing glacial intensity, also associated with the first major inputs of ice rafted debris to the North Atlantic. For many this marks the beginning of the “Quaternary ice ages”. It also marks a change from precession-dominated to obliquity-dominated climate forcing.

In summary, the extension of the Neogene System (Period) upwards provides an ideal opportunity to redefine the Quaternary, as a Subsystem (Subperiod) of the Neogene. The proposal for a Quaternary Subsystem is consistent with popular usage, does not require a new GSSP, and will end the arguments about the Plio/Pleistocene boundary.

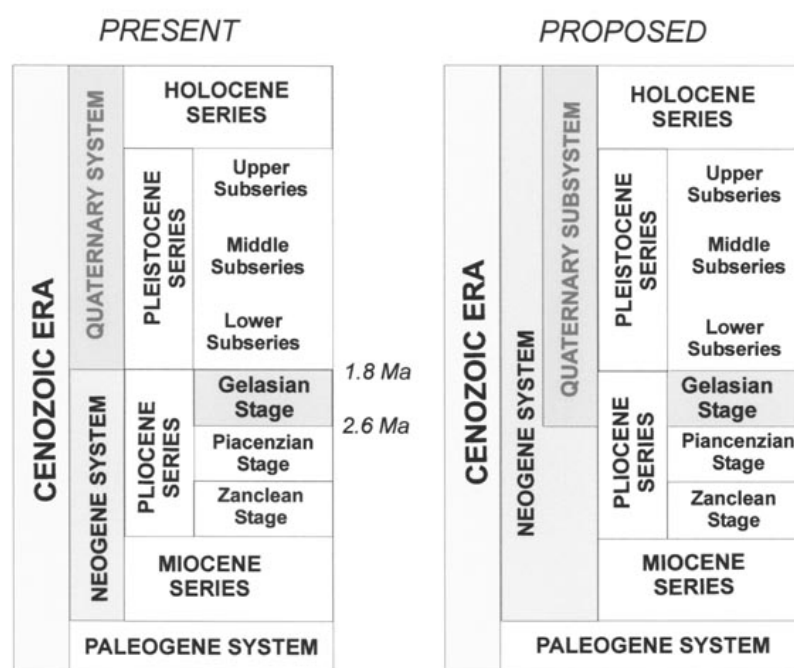


Figure 1 –Chronostratigraphic units of the Cenozoic Era illustrating the proposed redefinition of the Quaternary.

学生会員の皆さまへ「学生会員継続届け」提出のお願い (下線部追加)

2004年度(2004年8月1日～2005年7月31日)を学生会員として継続希望される方は、A4判の用紙(様式自由・ワープロ使用)に、申請者の所属・学年・氏名・連絡先・指導教員氏名を明記のうえ、指導教員の署名または捺印を添えて、至急日本学会事務センターまで郵送してください。有効期限が明記された学生証のコピーでもかまいません。また、本年度、学生会員として入会された方も提出願います。本届けが提出されない場合は、正会員会費にて会費請求がされますのでご注意ください。なお、日本学術振興会特別研究員(PD)や科学技術特別研究員などは通常会員となります。

問い合わせ先：庶務幹事 久保純子(早稲田大学)
(TEL:03-5286-1583、E-mail:sumik@waseda.jp)

送付先：〒113-8622 東京都文京区本駒込5-16-9
(財)日本学会事務センター3階 日本第四紀学会事務局宛
TEL:03-5814-5801/FAX:03-5814-5820

提出方法：郵便に限ります。

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。
広報幹事：兵頭政幸(mhyodo@kobe-u.ac.jp)宛にメールでお送り下さい。
第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会

神戸大学内海域環境教育研究センター	兵頭政幸
神戸大学大学教育研究センター	松下まり子
福島大学教育学部	後藤秀昭
編集書記	岩本容子

第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr> から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。